

彦根市埋蔵文化財調査報告 第4集

福 満 遺 跡

— 発掘調査概要報告書 —

昭和57年 3 月

彦根市教育委員会

序

福満遺跡は、早くから知られた遺跡でありましたが、過去に発掘調査の手がおよばず現在に至りました。この付近は、先に発掘調査概要報告書を刊行いたしました品井戸遺跡や白鳳時代の瓦の出土で知られる竹ヶ鼻廃寺等の遺跡があり、犬上川流域の歴史を知るうえで重要な位置を占めております。今回の発掘調査においても、縄文時代から中世にかけての複合遺跡である事が確認され、農耕社会の成り立ちを考える手掛りになる遺跡である事が判明いたしました。

今回の発掘調査は、彦根市立城南小学校の増改築工事に伴ない実施したもので、当遺跡周辺は南彦根駅開設に象徴されますように、彦根市内における人口急増地域の一つであります。この様ななかで遺跡の保護を考える時、非常に困難な状態であると言わざるを得ません。2000年以上もの間、地下に眠り続けた遺跡を発掘調査することは、歴史を知る喜びであると同時に、一つの責任を負う事でもあります。今後とも文化財保護行政推進にご理解とご協力をお願いいたします。

昭和 57 年 3 月

彦根市教育委員会

教育長 河原保男

例 言

1. 本書は、滋賀県彦根市西今町380番地に所在する福満遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は、彦根市立城南小学校の増改築工事に伴うもので、彦根市教育委員会社会教育課が実施した。
3. 現地における調査は、昭和56年4月14日から同年7月21日までの期間実施し、その後整理作業にあたった。
4. 調査は、社会教育課本田修平が担当した。また、現地における図面等は、調査協力員林定信（名古屋工業大学O、B）が、主に作成した。
5. 現地調査・整理作業にあたっては、多くの方々に御協力を得た。記して謝意を表したい。

1. 位置と環境

福満遺跡の発見は、大正7年に遡り、旧城南小学校北側水田の地下約1mの深さの所から、弥生時代後期の土器が掘り出された事による。この土器は、現在城南小学校に保管されており、この地方の弥生時代後期の指標的な土器の1つになっている。

彦根市は、旧愛知、犬上、坂田の各部の一部を含んで成り立っており、地形的には河川等で大きくは4地区に分けられ、福満遺跡の所在する西今町は、犬上川北岸に位置している。この犬上川は彦根市と多賀町の境附近まで扇状地を形成しており、当遺跡周辺は沖積地を形成しながら琵琶湖へと注ぐ。現在の犬上川は、竹ヶ鼻の集落附近で大きく廻り込むが、旧河道は一定のものではなかったと考えられる。当遺跡の上流約300mの所には、2次に亘って発掘調査を実施した品井戸遺跡がある。この調査結果から見れば、当地域は、後背湿地と自然堤防から成っており、この後背湿地の中を犬上川の旧河道は、粘土層・砂層・砂礫層が互層になった状態で、品井戸遺跡ではこれが最大の包含層となっていた。遺構は、自然堤防上の微高地で確認された。この事から見れば、犬上川は現在の様に流路が一定していたとは考えられず、低地を流れていたものと思われる。

福満遺跡の周辺に目を転じれば、西今町と竹ヶ鼻町の間には、バラエティに富んだ遺跡がある。前記の様に品井戸遺跡は、第1次調査において2間×2間の総柱の倉庫と考えられる建物跡と縄文時代晩期から中世にかけての包含層が確認されており、第2次調査では包含層が形成されていた湿地の南西側微高地からは、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての方形周溝墓・弥生時代後期の溝・中世の土坑等が確認されている。

また、この品井戸遺跡から犬上川までの間には、梅塚古墳と竹ヶ鼻廃寺とがある。梅塚古墳は、国鉄東海道本線の湖岸側に残された直径30mほどの竹藪で、東海道本線路床工事の土砂採取の際に石室より長脚二段透かしの高環・坏等の須恵器が出土したと言われる。竹ヶ鼻廃寺は、竹ヶ鼻町の東側に広がると考えられており、白鳳時代の複弁蓮華文軒丸瓦等古瓦の出土が知られている。同様に白鳳時代の複弁蓮華文軒丸瓦等古瓦の出土は、福満遺跡の南約2kmの高宮町遊撃隊でも知られている。この他には、その実体はほとんど不明であるが、北東約1kmの山之脇町に山之脇遺跡がある。この遺跡は、土師器が出土したと言われる。以上が、現在知られている犬上川北岸の遺跡である。

犬上川南岸では、竹ヶ鼻廃寺の対岸にあたる堀町の横地遺跡が、昭和55年に発掘調査が実施された。その結果は、封土が削平された古墳数基・住居跡・溝等が確認されており、弥生時代後期から平安時代におよぶ複合遺跡である。その立地は、品井戸遺跡と同様に安定した微高地上に位置していた。

以上のことから、犬上川流域の古代を考えれば、犬上川の後背湿地に人々が進出したのは早く、縄文時代晩期まで遡ることが、現在確認されている。この時代以降、安定した微高地が生活の主な場となり、重層的に遺構が残される状態となる。また、古墳の築造、白鳳時代寺院跡の出現等を考えれば、この地方の中心的な地域であったと言えるだろう。



- | | |
|----------------|----------|
| 1. 福満遺跡（今回調査地） | 5. 山之脇遺跡 |
| 2. 品井戸遺跡 | 6. 東沼波遺跡 |
| 3. 横地遺跡 | 7. 榎遺跡 |
| 4. 竹ヶ鼻廃寺 | 8. 蓮台寺遺跡 |
| | 9. 椿塚古墳 |

第1図 調査地点と周辺の遺跡

2. 調査に至る経過および調査方法

城南学区は、彦根市内でも人口急増地域の一つであり、南彦根駅・卸売市場開設等に見られる様に、市南部地域開発の一つの拠点とも言うべき地域になっている。この結果、市立城南小学校は、生徒数の増加をみ、また校舎の老朽化も激しかった。これ等の事態に対応する為、彦根市ではかねてより校舎の増改築を計画していたが、昭和56年度事業として実施する事となった。この城南小学校周辺は、「彦根市史」、「滋賀県遺跡目録」等の各種文献に記載されている周知の遺跡である。この事から、文化財保護法に基づき彦根市長より昭和56年3月5日付けで、文化庁長官あて「埋蔵文化財発掘通知」の提出があった。この通知を受けて、彦根市教育委員会では、福溝遺跡の発掘調査を計画した。

福溝遺跡の発掘調査は、その性格から増築予定部分は、全面調査する事を基本に計画した。増築計画は、南側校舎の増築と中庭部分への校舎建設が予定されていたので、それぞれにトレンチを設定して遺跡の範囲を確認する事を主目的とした。これは、調査予定地が小学校である関係上、覆り廊下等の施設があり、全面調査が不可能であった為で、空地を中心にトレンチ掘りをして遺構が確認され、その性格の調査が必要になった時点で、トレンチを拡張する事とした。当初、4ヶ所のトレンチを設定する事を計画した。

調査は、彦根市教育委員会が調査主体となり、昭和56年4月14日から実施し、同年7月21日までの期間を要した。

3. 調査結果

校舎の増改築予定地に、4ヶ所のトレンチを設定した。その結果、トレンチでは、中世の包含層の下で良好な縄文晩期の遺物が入る包含層が確認され、3・4トレンチでは、竪穴式住居跡4棟、をはじめとする遺構面が確認された。

遺構面を地形から見れば、犬上川が形成した沖積地の中の南北に伸びる微高地上に位置する。

〔1トレンチ〕

南側校舎の東側増設予定地に設定したトレンチで、地形的には、このトレンチ設定地区と犬上川の間に、後背地であったと考えられ、犬上川に向かって、徐々に低くなって行く地点と考えられた。

層序は、第1層が運動場整地の為の盛り土の層で、第2層は旧田面であり耕作土であった。第3層は、床土であり、この第3層以下が、遺物を含む包含層となる。第4層は、茶灰色粘質土で10～20cmの厚さがあり、縄文時代晩期から中世までの雑多な遺物を包含していた。第5層は、西側と東側で土層が分かれ、西側（校舎側） $\frac{1}{3}$ が、地山と考えられる黄褐色土層と東側 $\frac{2}{3}$ が、砂礫の混った茶褐色粘質土になる。この地山には、遺構は確認できなかったが、砂礫混り茶褐色粘質土には、1辺1.5m×2m・深さ30～40cmの土壇があり、灰釉陶器等が入っており、平安時代と考えられる。また、素掘りの井戸・ピット等が確認されているが、遺物の出土は認められなかった。これ等の事から考えれば、この遺構面は平安時代のもと考えられる。この第5層以下は、地山がほぼ垂直に落ち込み、そこに溜まり込んだもので、土層から見れば、犬上川もしくは分流の旧河道であった事が考えられる。第5層には、縄文時代晩期の土器を主とし、若干の弥生時代後期の遺物を包含していた。第6層以下は、縄文時代晩期の包含層で、砂礫層・粘土層・シルト層が交互に堆積する互層となっていた。この包含層は、第8層まで確認したが、これ以下は、礫層である事やトレンチ壁の崩壊・湧水等の為、掘り下げの事が困難になり断念せざるを得なかった。この地点で、地表下約2.8mであった。

以上の事から考えれば、縄文時代晩期の包含層は、犬上川旧河道もしくは、分流旧河道に形成されたものであり、この旧河道は古墳時代には、埋ったものと考えられる。出土した縄文時代晩期の土器は、破片が大きい事や摩滅があまり見られない事から遠くから流れ込んだものではなく、この付近に住居跡等の遺構があるものと考えられる。

〔2トレンチ〕

層序は、第1層が1トレンチと同様、校舎用地造成の為の盛り土で、第2層・3層は旧耕作土・床土となる。第3層の床土は薄く約5cmほどであったが、他のトレンチ同様、若干の遺物を含む包含層となっていた。この下の第4層は、1トレンチ・3トレンチで確認された地山の土質と似た土

層であるが、色がやや茶褐色粘質土で礫が混じる。この層は、堆積層であることが礫の混じっている状態から考えられるが、遺物の出土は確認されなかった。

〔3 トレンチ〕

城南小学校中庭部分にあたっており、ここに旧校舎を取り壊し、新校舎を改築する予定の為、可能な限り調査面積を広げた。その結果、住居跡4棟を始めとする遺構面を確認した。この遺構面までの土層は、学校用地造成時の盛り土層・旧耕作土層・包含層・遺構面から成っており、包含層には縄文時代晩期から中世におよぶ包含されていた。

住居跡 3-1

竪穴住居跡では、ほぼ全体が確認された唯一のもので、形態は方形プランを持つ1辺8mの大型の住居跡である。その構造は、巾10～15cmの周溝が四周をめぐり、直径40～50cmの柱穴が4本確認され、柱穴間の距離はほぼ4mであった。その他のカマドや炉等の内部施設は、確認されなかった。また、埋土は、褐茶色粘質土の単層で深さも15～20cmと浅くかなり削平を受けていると考えられる。

出土遺物は、床面についていたものではなく、出土した遺物のほとんどが、埋土中よりのものである。小破片のものが主であり、実測可能なものは極少量であるが、弥生時代後期から古墳時代後期までの土器を出土している。

この地点は、住居跡4棟が切り合っているが、住居跡-1が他の住居跡を切っており、一番新しいものであるが、古墳時代後期にはすでに埋没していた。

住居跡 3-2

住居跡3-1の北辺で、隅丸のコーナだけが確認され、プランは隅丸方形と考えられるが、その大部分が住居跡-3-1に切られており不明である。床面に40×50cmの範囲で焼け土が確認されている。

住居跡 3-3

住居跡3-1の掘り込みが、床面に達した時点で確認されたもので、形態は方形プランを持つ1辺5.4mの住居跡である。その構造は、巾12～20cmの周溝を四周に巡らしていたと考えられるが、西側の1辺は攪乱されており不明である。柱穴は、東側の2本は確認でき、直径25～35cmで柱穴間は2.6mを計る。カマド等の内部施設は、住居跡-1同様に確認されなかった。埋土は暗茶色粘質土層の単層で、深さは最深15cmと浅い。出土遺物も小破片がほとんどであるが、住居跡-1に切られていた。主軸は、ほぼ南北をとる。

住居跡 3-4

住居跡3-1の西側で確認されたもので、1辺8.5mを計る方形プランを持つ竪穴住居跡である。周溝は検出されなかったが、柱穴は中央部に配置され、直径25～35cmで柱穴間は、3m前後を計る。他のカマドや炉等の内部施設は確認できなかった。

また、遺物も床面についたものはなく、埋土中よりの小破片が主で、その時代を推定する事は困難である。

土 壇

土壇-Cは、住居跡3-1の北半部に位置し、1辺1.3mの四辺形のプランを持ち断面から住居跡3-1を切り込んでいる。埋土は、茶灰色粘質土の単層であり、深さ2.5cmを計る。遺物は、床面より2~3cm浮いていたが、古墳時代後期の長甕片及び子持勾玉が出土している。

土壇-Eは、90×70cmの楕円形を成し深さ約20cmで、埋土は、暗茶灰色粘質土の単層であった。遺物は、奈良時代前期の須恵器坏身3個・坏蓋1個が若干浮いたかたちで入っていた。

他の土壇は、土器の小破片のみの出土であり、その時期を考える事は困難であった。

溝 3-1

巾60cm・深さ30cmを計り、断面「U」字形をした溝で、埋土中には、弥生時代後期から古墳時代前期の土器の小片が入っていた。

〔4 トレンチ〕

木造校舎と被り廊下の間に設定したもので、地山は礫を多く含んでおり、南に向って落ち込んでいた。遺構面に至る土層は、3トレンチを基本に同様であるが、旧耕作土層がやや厚く約30cmほどあり、全体的に3トレンチに較べ遺構面が低くなる。

遺構は、直径1.6mの井戸状のものが確認された。深さ60cmの紫銅りの遺構であるが、遺物はほとんど無く時期は不明である。

4. ま と め

福満遺跡は、早くから知られていた弥生時代の遺跡ではあるが、今回の発掘調査では明確な弥生時代の遺構は確認されなかった。しかし、縄文時代晩期の良好な包含層が確認されたのをはじめ、古墳時代後期の住居跡群や平安時代の土墳等が検出されたことから、縄文時代晩期から平安時代におよぶ複合遺跡であることが確認された。

今後は、今回の調査地点周辺で、遺物の出土だけが知られる縄文時代晩期および弥生時代後期から古墳時代前期の遺構を確認する事が問題となろう。また、この周辺は、品井戸遺跡・竹ヶ鼻廃寺・椿塚古墳等の犬上川後背湿地に点在する微高地に立地する遺跡が多数所在する。これ等の遺跡間の相互関連の中から、犬上川流域の古代史が明らかになって来ると考えられ、今後の大きな課題の一つになるだろう。

5. 福満遺跡 出土遺物観察表

番号	器形	法量	形 態	調 整	備 考
1	深鉢 (縄文式土器)	18.8cm (口径)	◦斜め上方に口縁部が直線的に開き口縁外面下にヘラによる刻みのついた突帯を持つ深鉢である。	◦内面 横ナゲ調整 ◦外面 突帯及び口縁部は横ナゲ調整 ◦体部は細かいヘラ磨き調整	1-T 土壌A内胎土: 1mm前後の砂粒を含む 密色調: 暗褐色 焼成: 硬
2	皿 (黒色土器)	10.6cm (口径)	◦体部はやや内彎して開き、口縁部は外側に引き出され、端部は丸くおさめらる。	◦体部内面は粗いヘラ磨き ◦口縁部内外面は横ナゲ調整 ◦体部外面は不調整	1-T 土壌A内胎土: 精良で密色調: 黒色 焼成: 硬
3	皿 (土師器)	16.6cm (口径)	◦体部は内彎して開き、口縁端部をナゲにより面取りする。	◦内面横ナゲ調整 ◦外面、口縁部下を二段にナゲる。底部不調整	1-T 土壌A内胎土: 精良で密色調: 明褐色 焼成: 硬
4	碗 (灰胎陶器)	14.4cm (口径)	◦体部はやや内彎気味に開き、口縁部はやや外側に引き出される。	◦内外面クロコナゲ ◦底部内面に重ね焼き痕を残す。 ◦灰胎を内面及び外面は口縁部下まで塗る。	1-T 土壌A内胎土: 密焼成: 硬
5	碗 (山茶碗)	16.6cm (口径)	◦体部は内彎して立上り、口縁部はやや外彎して開く、高台は外側にふんばる貼り付け高台である。	◦内外面クロコナゲ ◦底部内面に重ね焼き痕を残す。 ◦高台には、もみ跡を残す。	1-T 土壌A内胎土: 密色調: 白灰色 焼成: 硬
6	浅鉢 (縄文式土器)	24.2cm (口径)	◦体部は内彎して開き、頸部は外変しながら上方に立上り、端部は外側に引き出される。体部と頸部の境にはヘラによる一条の沈線を施し、頸部には縦の沈線を施す。	◦内面は横ナゲ調整、口縁部下に指による圧痕を残す。 ◦外面の口縁部から頸部にかけては横ナゲ調整 体部外面はヘラナゲ調整。	榎木の遺着時に出土胎土: 1~2mmの砂粒を含む やや粗色調: 乳白褐色 焼成: 硬
7	深鉢 (縄文式土器)	22.1cm (口径)	◦長胴の体部から口縁部は内彎して立上り端部に面を作り、すぐ下にヘラによる刻みを持つ、突帯を施す。	◦内面は横ナゲ調整。 ◦外面、突帯部までは横ナゲ調整。 ◦頸部は半截の竹管状の工具による横ナゲ調整 肩部はヘラ状の工具による横ナゲ調整、体部は横方向のヘラ削りと思われる。	1-T 3層胎土: 1~2mmの砂粒を含む やや粗色調: 黒灰色 焼成: 硬
8	台付皿 (土師器)	16.2cm (口径)	◦体部は弱く内彎して開き、肩部に稜を作り、口縁部より外傾して開き、端部を丸くおさめらる。高い貼り付け高台でやや外彎してふんばり、端部に弱い面を作る。	◦内外面 横ナゲ調整	1-T 3層胎土: 1mm以下の砂粒を含む 密色調: 乳白白色 焼成: 硬

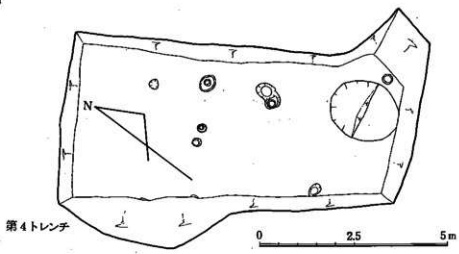
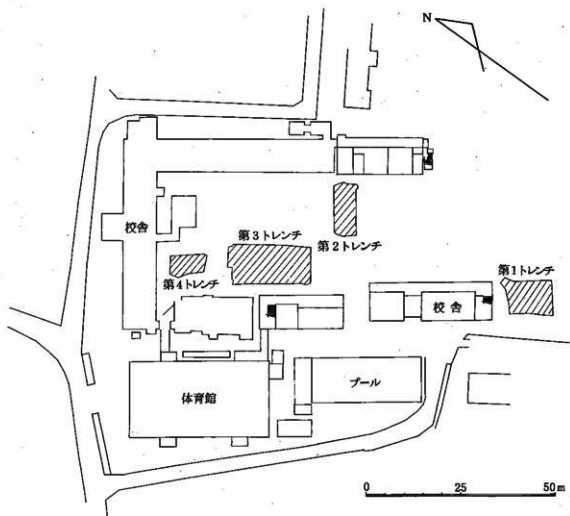
番号	器形	法量	形 態	調 整	備 考
9	皿 (土師器)	15.2cm (口径)	◦ 体部は内彎して開き、口縁部は上方に立上り端部を丸くおさめる。	◦ 口縁部は内外面とも横ナデ調整 ◦ 体部は内面ナデ調整、外面は不調整 ◦ 底部は不調整で指頭圧痕を残す	1-T 3層 胎土：精良で密色調：乳白黄色 焼成：硬
10	皿 (土師器)	9.5cm (口径)	◦ 体部は直線的に斜傾して開き端部は丸くおさめる。	◦ 口縁部は内外面ともに横ナデ調整、底部内面はナデ調整で外面は不調整	1-T 3層 胎土：精良で密色調：乳白褐色 焼成：硬
11	皿 (土師器)	11.6cm (口径)	◦ 体部は内彎して開き、口縁部は上方に引き出され端部を丸くおさめる。	◦ 口縁部は内外面ともに横ナデ調整 ◦ 底部内面はナデ調整、外面は不調整	1-T 3層 胎土：精良で密色調：乳白褐色 焼成：硬
12	皿 (土師器)	9.3cm (口径)	◦ 体部は内彎して開き、口縁部は弱く引き出され、端部を丸くおさめる。	◦ 口縁部は内外面とも横ナデ調整 ◦ 底部内面はナデ調整、外面は不調整	1-T 3層 胎土：精良で密色調：乳白褐色 焼成：硬
13		9.6cm (口径)			
14	鉢 (縄文式土器)	8.1cm (口径)	◦ 内彎して立上る体部から、そのまま口縁部に至り、端部を丸くおさめる。	◦ 内外面とも横ナデ調整	1-T 5層 胎土：1mm以下の砂粒を含む やや粗色調：暗褐色 焼成：やや硬
15	鉢 (縄文式土器)	11.9cm (口径)	◦ 内彎して立上る体部から、そのまま口縁部に至り、端部を丸くおさめる。口縁部内面に一条のは線をめぐるす。	◦ 内外面とも粗いヘラ磨き。	1-T 5層 胎土：1~2mmの砂粒を含む やや粗色調：明褐色 焼成：やや軟
16	深鉢 (縄文式土器)	28.2cm (口径)	◦ 長胴の体部がやや内傾しながら口縁部に至り、端部を弱く外方につまみ出す。	◦ 内面 不明 ◦ 外面 ヘラナデ調整	1-T 5層 胎土：1mm前後の砂粒を含む 粗色調：暗褐色 焼成：軟
17	深鉢 (縄文式土器)	6.8cm (底径)	◦ 平底の底部で中心部が弱く凹む。	◦ 調整法 不明	1-T 5層 胎土：1~2mmの砂粒を含む やや粗色調：明褐色 焼成：軟
18	浅鉢 (縄文式土器)	17cm (口径)	◦ 頸部はやや内傾して立上り、口縁部は外彎して開き、端部を丸くおさめる。	◦ 内面は横ナデ調整 ◦ 外面は口縁部、頸部とも細かいヘラ磨き調整	1-T 6層 胎土：1mm以下の砂粒を含む 密色調：灰褐色 焼成：やや軟
19	浅鉢	31cm	◦ 肩部に突帯を作り、この上に一条の凹線を入れ、頸部は外反して開き、口縁部に至り端	◦ 内外面ともに横方向のヘラ磨き調整 ◦ 口縁部は横ナデ調整	1-T 6層 胎土：1mm前後の砂粒を若干含む 密

番号	器形	法量	形 態	調 整	備 考
	(縄文式土器)	(口径)	部に面をつくる。		色調：明褐色 焼成：硬
20	浅鉢 (縄文式土器)	27.2 cm (口径)	○口縁部は、外彎して開く頸部より屈曲して立上り、斜め上方に引き出され肩部内面を弱く肥厚させる。	○内外面とも横ナゲ調整	1-T 6層 胎土：1mm以下の砂粒を含む 密 色調：淡白灰色 焼成：やや硬
21	深鉢 (縄文式土器)	15 cm (口径)	○弱く内彎して立上り口縁部に至る。 ○口縁部下外面には三条の凹線を持ち口縁部は小さな山形口縁で内面にも一条の凹線を入れる。	○体部は内外面ともに密なへら磨き調整 ○口縁部は横ナゲ調整	1-T 6層 胎土：1mm以下の砂粒を含む 密 色調：暗茶褐色 焼成：硬
22	深鉢 (縄文式土器)	20.6 cm (口径)	○弱く内彎して立上る体部より肩部に至り、弱い稜を作り、頸部は外彎して立上り、端部は丸くおさめる。口縁部外面にへらによる刻みをもつ突帯をつける。	○内面は体部から口縁部にかけて横ナゲ調整 ○外面は口縁部から肩部にかけて横ナゲ調整、体部はへら削り調整	1-T 6層 胎土：1~2mmの砂粒を含む やや粗 色調：淡褐灰色 焼成：やや軟
23	深鉢 (縄文式土器)	25 cm (口径)	○口縁部は弱く外反して開き、端部を丸くおさめる。突帯はしっかりしておりへらにより刻まれる。	○内外面とも横ナゲ調整	1-T 6層 胎土：良好 色調：明褐色 焼成：硬
24	深鉢 (縄文式土器)	26.6 cm (口径)	○長胴の体部より、肩部に至り頸部は弱く外反して立上り、口縁部に至る。 ○口縁部外面にへらによって刻まれた突帯を持ち、突帯と口縁部の境に弱い凹線を入れ、口縁部内面にもへらによる一条の沈線を加す。	○内面は体部から口縁部まで横ナゲ調整 ○外面は肩まで横ナゲ調整 ○体部はへら削りを施す	1-T 6層 胎土：1~2mmの砂粒を含む 密 色調：淡黒灰色 焼成：硬
25	浅鉢 (縄文式土器)	25.5 cm (口径)	○肩部が強く張り、稜を持ち頸部は屈曲して内傾し、口縁部は外より折りまげられ、山形口縁を作る。口縁内面にへらによる沈線一条を入れる。	○内面は頸部までへら状の工具による横ナゲ調整 ○口縁部は横方向のへら磨き調整 ○外面は体部から口縁部までへら磨き調整	1-T 7層 胎土：良好 色調：茶灰色 焼成：硬
26	深鉢 (縄文式土器)	26.2 cm (口径)	○長胴な体部より肩部に至り稜を作り、頸部は外反して立上り口縁部に至る。 ○口縁部は面を作りへら状の工具で刻みを入れる。	○内面は横ナゲ調整 ○外面は口縁部より肩部までは横ナゲ調整、肩部以下はへら状の工具による横ナゲ調整	1-T 7層 胎土：1~2mmの砂粒を含む 粗 色調：褐灰色 焼成：硬
27	深鉢 (縄文式土器)	14.6 cm (口径)	○体部はあまり残らず、すばまり平底の底部に至る。肩部は弱い稜を持ち、頸部は外反し口縁部に至り、端部外面にへ	○内面は横ナゲ調整 ○外面は肩部まで横ナゲ調整 ○体部はへらナゲ調整	1-T 7層 胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：茶褐色

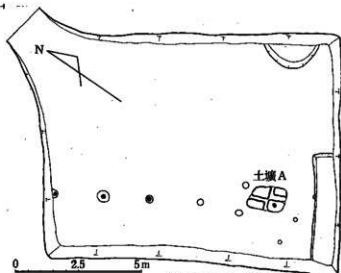
番号	器形	法量	形 態	調 整	備 考
			ラによる刻みを持つ突帯が作られる。		焼成：硬
28	深鉢 (縄文式土器)	24.8 cm (口径)	○胴部は歪らず斜傾して立上り肩部に至り、頸部との境に弱い段を作り頸部は外反しながら立上り口縁部に至る。突帯は口縁部下に作られ、ヘラによる刻みが入られる。	○内面は横ナゲ調整 ○外面は頸部まで横ナゲ調整。肩部以下ヘラ状の工具によるナゲ調整	1-T 7層 胎土：1mm前後の砂粒を含む 色調：灰褐色 焼成：やや硬
29	深鉢 (縄文式土器)	20.6 cm (口径)	○長胴な体部があまり歪らない肩部に至り、頸部はすばまり内傾しながら口縁部に至る。突帯は口縁端部につけられヘラ状の工具で刻みを入られる。	○内面は横ナゲ調整 ○外面は口縁部横ナゲ調整、頸部は半截の竹管状の工具によるナゲ調整、肩部以下ヘラ状の工具によるナゲ調整	1-T 7層 胎土：1~2mmの砂粒を含む 色調：明灰褐色 焼成：硬
30	深鉢 (縄文式土器)	31 cm (口径)	○長胴の体部より肩は歪らず頸部は外反して立上り口縁部に至る。口縁部は端部が面取りされ、突帯はやや下に付き、ヘラによる刻みを入られ、突帯と端部の間に弱い凹線が入り、内面にはヘラによる沈線が入られる。	○内面は横ナゲ調整であるが、頸部に指頭圧痕が残る。 ○外面は頸部まで横ナゲ調整、体部はヘラ状の工具によるナゲ調整	1-T 7層 胎土：1mm以下の砂粒を含む やや粗 色調：淡褐色 焼成：硬
31	深鉢 (縄文式土器)	34.7 cm (口径)	○体部は傾斜して直線的に立上り口縁部に至る。突帯は口縁部の下に付きヘラで刻まれる。	○内面は横ナゲ調整 ○外面は頸部まで横ナゲ調整、肩部以下ヘラ磨き調整	1-T 7層 胎土：2~3mmの砂粒を含む 色調：淡褐色 焼成：軟
32	深鉢 (縄文式土器)	38.8 cm (口径)	○体部は内彎して立上り、口縁部に至る。口縁部は薄く作られ、やや下にヘラで刻まれた突帯を付ける。	○内面は横ナゲ調整 ○外面は頸部まで横ナゲ調整、肩部以下ヘラ削り調整	1-T 7層 胎土：1~2mmの砂粒を含む 色調：濃灰色 焼成：やや硬
33	壺 (弥生式土器)	21.2 cm (口径)	○頸部は斜傾して立上り屈曲して口縁部に至る。口縁部は垂下し、外面にくし状工具による凹線文を入れ、端部は斜め上方に引き出される。	○調整法不明	3-T 胎土：2mm前後の砂粒を含む 密 色調：明赤褐色 焼成：軟
34	壺 (土師製)	15.4 cm (口径)	○体部は球形、頸部はしまり外彎しながら開き、外側に肥厚させた口縁部に至る。	○内面 不明 ○外面 口縁部から頸部まで横ナゲ調整、体部は粗いハケ調整	3-T 胎土：1mm前後の砂粒を含む 密 色調：淡白褐色 焼成：軟
35	長壺 (土師製)	22 cm (口径)	○長胴の体部よりしまらない部に至り口縁部は内彎して立上り端部に面を作り外面を弱く引き出す。	○胴部内外面はハケ調整 ○口縁部内外面は横ナゲ調整	3-T 土横C 胎土：1mm前後の砂粒を含む 色調：淡白褐色 焼成：軟

番号	器形	法盤	形 態	調 整	備 考
36	長 壺 (土師器)	25 cm (口径)	○長胴の体部よりしまらない頸部に至り、口縁部は弱く外反しながら開き、端部を上方に引き出す。	○内面はナデ調整 ○口縁部外面は横ナデ調整 ○胴部外面はハケ調整	3-T 住居跡 3-1 胎土：1mm前後の砂粒を含む 色調：淡赤褐色 焼成：軟
37	環 (土師器)	19.3 cm (口径)	○体部は内彎して立上り、口縁部は屈曲して外傾し、端部を弱く上方につまみ出す。	○内外面とも横ナデ調整 ○底部外面に指頭圧痕を残す。	3-T 土壌A内 胎土：精良 色調：赤褐色 焼成：やや軟
38	瓜 (土師器)	18.2 cm (口径)	○体部は内彎して開き、中位部より外彎して立上り、口縁端部を上方に引き出す。	○内外面とも横ナデ調整 ○底部外面に指頭圧痕を残す。	3-T 土壌A内 胎土：精良 色調：赤褐色 焼成：やや軟
39	甕 (須恵器)	21.6 cm (口径)	○頸部は弱く外彎して開き屈曲して上方に立上る口縁に至る頸部外面にへら配号あり。	○ロクロナデ調整	3-T 住居跡 3-2 胎土：密 色調：濃灰色 焼成：硬
40	環身 (須恵器)	11.8 cm (口径)	○体部は内彎して受部に至り、受部は弱く内彎しながら立上る。	○体部外面中位部以下はへら削り、他はロクロナデ調整	3-T 胎土：密 色調：灰色 焼成：硬
41 42	環身 (須恵器)	12.8 cm 12.2 cm (口径)	○平底の底部より体部は斜傾して立上り口縁部に至る。 口縁端部は丸くおさめる。	○ロクロナデ調整	3-T 胎土：密 色調：(41)濃青灰色 (42)乳白色 焼成：硬
43	環蓋 (須恵器)	16 cm (口径)	○ドーム状の天井部に扁平なツマミが付き掛部は斜め下方に引き出される。	○ロクロナデ調整	3-T 土壌E内 胎土：密 色調：灰色 焼成：硬
44 45	環身 (須恵器)	14.7 cm 14 cm (口径)	○外にふんばった高台から斜傾して立上り口縁部に至る。端部は丸くおさめる。	○ロクロナデ調整 ○高台は貼り付けである	3-T 土壌E内 胎土：密 色調：灰色 焼成：硬
46	壺 (土師器)	15 cm (口径)	○球形の体部より頸部に至り口縁部は単純「く」の字口縁で端部は指でおさえて面取りをする。	○内外面ともにハケ調整	4-T 井戸内 胎土：2mm前後の砂粒を含む 色調：明赤褐色 焼成：軟
47	甕 (土師器)	15.1 cm (口径)	同 上	同 上	4-T 2層 同 上
48	器合 (土師器)	11 cm (口径)	○脚部はロート状に開き、三孔の通しをもつ、受部は斜傾し	○脚部内面はハケ調整、 外面及び受部内面はへ	4-T 2層 胎土：1mm前後の砂

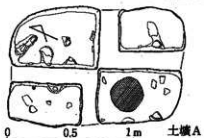
番号	器形	法量	形 態	調 整	備 考
			て直線的に閉き端部を面取りする。	ラ磨き調整と思われる	粒を含む 色調：赤褐色 焼成：やや軟
49 50	石 鉢 #	2.7 cm 2.2 cm (長さ)	○有茎石鉢 ○ #	○石材はサヌカイト	1-T 3-T 住3-1内
51 52	# #	1.5 cm 1.5 cm	○無茎石鉢 正三角形状を呈す	○石材はサヌカイト	3-T 住3-1内 3-T 住3-2内
53 54 55 56	# # # #	1.7 cm 1.6 cm 1.7 cm 1.5 cm	○無茎石鉢 二等辺三角形をなす。 ○基部を炊入する。	○石材はサヌカイト	3-T 住3-2内 4-T 3-T 3-T 住3-1内
57	子持勾玉	8.2 cm (長さ)	○8ケの子(背部3ケ腹部1ケ左右側面2ケ)を持ち表面全体に円筒紋が施されている。頭部は平らに作られ真中に一条の溝をつけ、先端は左右2本の溝を施す。	○石材は滑石	3-T 土曜C
58	自然遺物		大半はくすみ、朽の実がしめ他に葉等が認められる。		1-T 6層~8層



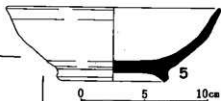
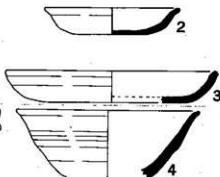
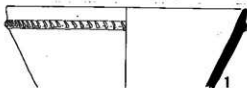
第2図 トレンチ配置図及び第4トレンチ遺構面



第1トレンチ (第4層)

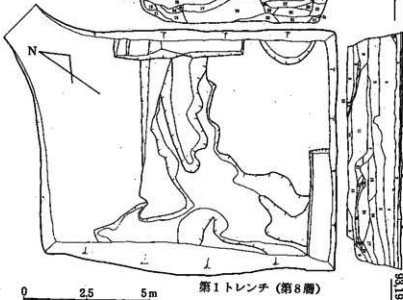
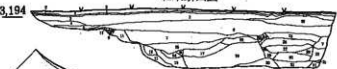


土壇 A



北東断面図

93,194



第1トレンチ (第8層)

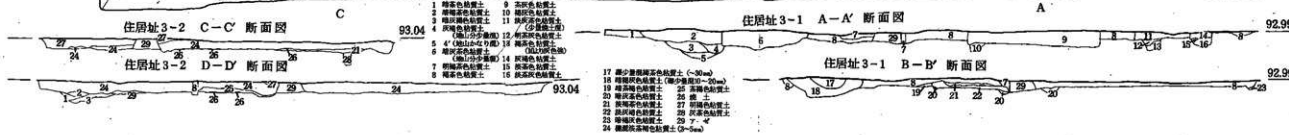
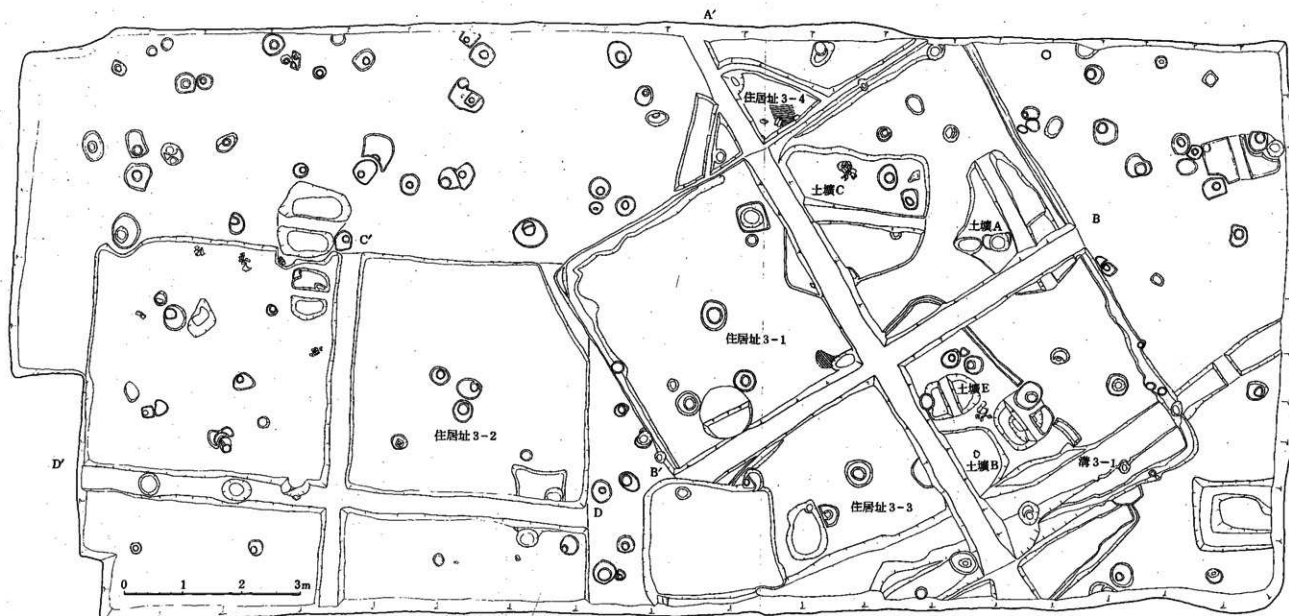
第1トレンチ 北東断面図

- | | |
|---------------|-------------|
| 1 土 | 17 灰褐色砂質土 |
| 2 黄褐色粘質土 | 18 砂質灰褐色粘質土 |
| 3 赤褐色砂層 | 19 褐色粘質土 |
| 4 赤土 (黄褐色粘質土) | 20 褐色粘質土 |
| 5 黄褐色粘質土 | 21 褐色粘質土 |
| 6 黄褐色粘質土 | 22 黄褐色粘質土 |
| 7 赤褐色粘質土 | 23 黄褐色粘質土 |
| 8 赤褐色粘質土 | 24 赤褐色粘質土 |
| 9 赤褐色粘質土 | 25 黄褐色粘質土 |
| 10 赤褐色粘質土 | 26 黄褐色粘質土 |
| 11 赤褐色粘質土 | 27 黄褐色粘質土 |
| 12 赤褐色粘質土 | 28 赤褐色粘質土 |
| 13 赤褐色粘質土 | 29 黄褐色粘質土 |
| 14 赤褐色粘質土 | 30 赤褐色粘質土 |
| 15 赤褐色粘質土 | 31 赤褐色粘質土 |
| 16 赤褐色粘質土 | 32 赤褐色粘質土 |

第1トレンチ 南東断面図

- | | |
|---------------|------------|
| 1 土 | 13 砂質灰褐色粘土 |
| 2 赤褐色粘質土 | 14 赤褐色粘土 |
| 3 赤土 (黄褐色粘質土) | 15 黄褐色粘質土 |
| 4 黄褐色粘質土 | 16 黄褐色粘質土 |
| 5 赤褐色粘質土 | 17 黄褐色粘質土 |
| 6 赤褐色粘質土 | 18 黄褐色粘質土 |
| 7 砂質灰褐色粘土 | 19 黄褐色粘質土 |
| 8 赤褐色粘質土 | 20 黄褐色粘質土 |
| 9 赤褐色粘質土 | 21 黄褐色粘質土 |
| 10 赤褐色粘質土 | 22 黄褐色粘質土 |
| 11 赤褐色粘質土 | 23 黄褐色粘質土 |
| 12 黄褐色粘質土 | 24 黄褐色粘質土 |

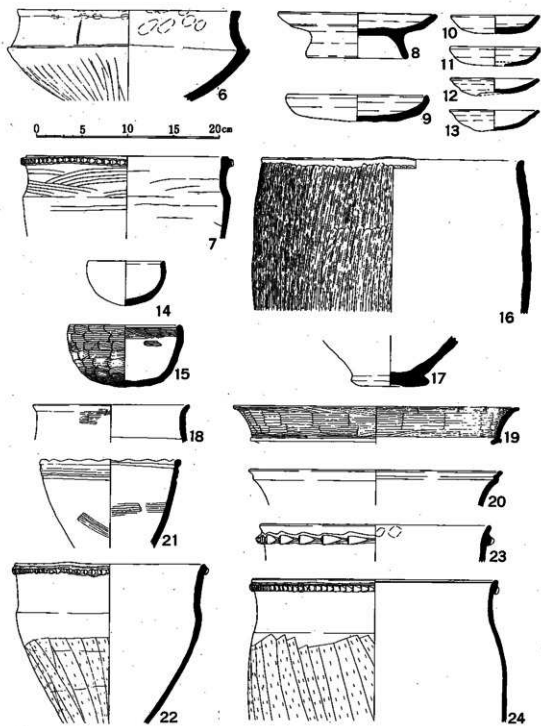
第3図 第1トレンチ第4層遺構図及び第8層



- 1 褐色粘質土
- 2 褐色粘質土
- 3 褐色粘質土
- 4 灰褐色粘質土
- 5 4' (加土中) 土
- 6 暗褐色粘質土
- 7 暗褐色粘質土
- 8 暗褐色粘質土
- 9 灰褐色粘質土
- 10 暗褐色粘質土
- 11 暗褐色粘質土
- 12 暗褐色粘質土
- 13 暗褐色粘質土
- 14 暗褐色粘質土
- 15 暗褐色粘質土
- 16 暗褐色粘質土

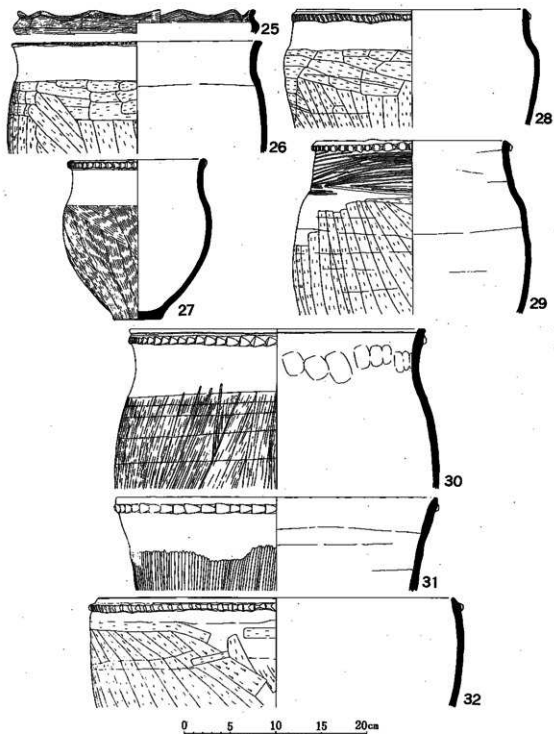
- 17 薄少量腐植土 (厚さ約10-20cm)
- 18 暗褐色粘質土
- 19 暗褐色粘質土
- 20 暗褐色粘質土
- 21 暗褐色粘質土
- 22 暗褐色粘質土
- 23 暗褐色粘質土
- 24 暗褐色粘質土

第4図 第3トレンチ遺構図



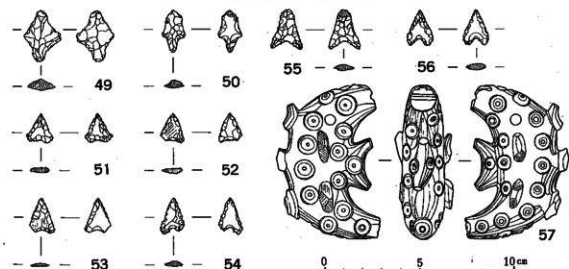
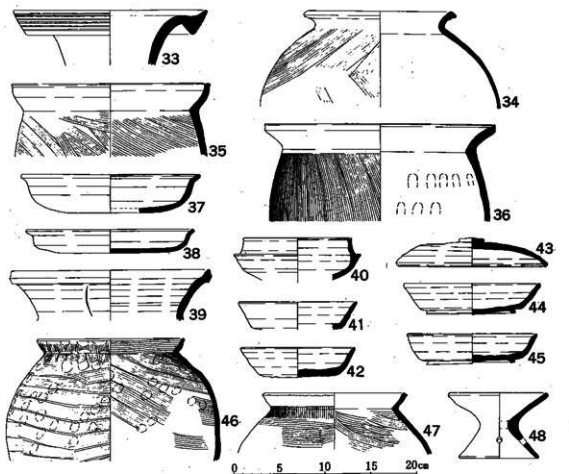
6 1-T 横植木移植時出土 7~13 1-T 第3層 14~17 1-T 第5層 18~24 1-T 第6層

第5圖 出土遺物実測図



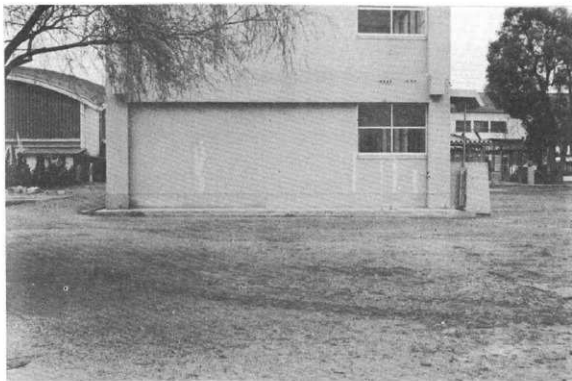
25~32 1-T 第7層

第6圖 出土遺物実測圖



33·34·40·41·42 3-T包含層 35 3-T土墳C 36 3-T住居跡3-1 37·38 3-T土墳A
 39 3-T住居跡3-2 43·44·45 3-T土墳E 46 4-T井戸内 47·48 4-T包含層

第7圖 出土遺物実測圖



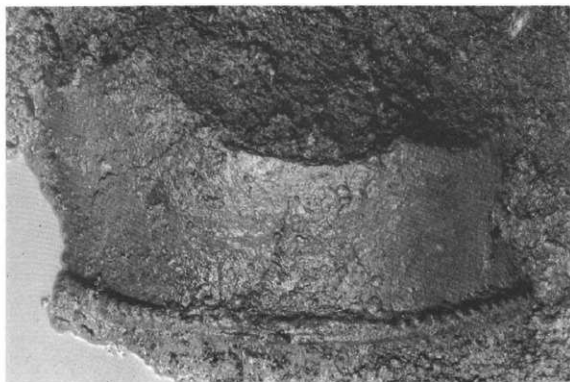
第1トレンチ調査前近影



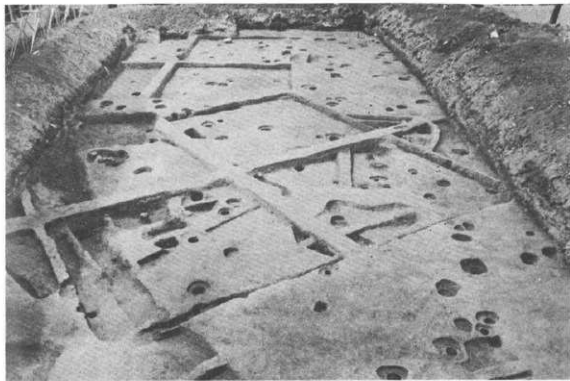
第2・3・4トレンチ調査前近影



第1トレンチ第8層



第1トレンチ第6層遺物出土状況



第3トレンチ遺構面



第3トレンチ土堀E内遺物出土状況





16



24



17



26



21



27



22



28



29



30



31



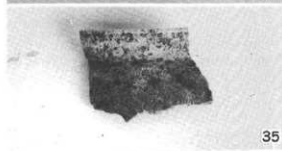
32



33



34



35



36



37

